

から  
は  
物語



全譯 王朝文學叢書

第十卷

大正十四年一月十五日印刷  
大正十四年一月二十日發行

全譯王朝文學叢書 第十卷

【非賣品】

著者 吉澤義則

發行兼印刷人 熊田盛夫

印刷所 英文堂印刷所

京都市上京區下長者町油小路西入

株式會社文獻書院內

王朝文學叢書刊行會

振替口座 阪六九九七九六番

發行所

目次

落窪物語……………三六四

## 落窪物語

むかし、よい娘をあまた持たれた中納言があつた。上の大君と中の君には、もはや掣取り  
すませて、西と東の對の屋に花やかに住はせてゐられた。

次の三四の姫君にも、近々裳着の祝儀をするとあつて、愛撫いたらぬ隈もなかつた。

裳着、男子の元服と同じやうに、女子は十二三で始めて裳をつけたのである。

こゝにひとり、中納言が前方折々通はれた思ひ人で、王族の血をひいた方の腹に出来た日蔭の姫君がある——その産みの母君もどくに亡くなつて居られた。

放出、正殿の廂の間に設けた應接所

ところが今の北方はどうしたものやら、この姫を女房達の數ほどにも思はれず、表御殿の放出の一室で、床の低い——落窪——二間をあてがつておかれた。御姉妹なみに君達なぞとは呼ばせず「何の御方」といふ尊稱はなほさらお許しにならぬ。いつそ召使同様の呼名をつけようかと思はれるが、さすが父上の思召もいかゞと遠慮せられてたゞ「おちくぼの君といへ」と命じられた。異様な名であるが誰も彼もさうよびなれてゐた。

大殿も姫に對しては、幼少の時から愛情も薄かつたのか、一向に構はれないので、なほさらること、北方ひとりの天下で、無理非道な仕打も随分に多かつた。

この姫君には力になる身寄もなく、乳母さへもないのである。たゞ母君御在世の折から使ひつけた童女で、心利いた女子をひとり、「後見」といふ名で今も使つて居られた。

互に年若なこの二人は餘所目にもあはれに愛し合つて、片時、傍を離れることもなう、うき年月を送つてゐたのである。

それにつけても姫君の美しさは、繼母御秘藏の娘御たちに勝るとも劣ることはないのであるが、世間交際もしないので、この人の存在を誰一人知る者もなかつた。

かゝるうちにも月日は流れて、やうく世情も分つてくるにつけても、姫は、しみじみ自分の境遇の、なさけなさか思はれて、こんな哀しい歌を口ずさむのが慣ひともなつてゐた。

日にそへてうさのみまさる世の中に心づくしの身をいかにせん

日毎に辛き悲しさばかりの増してくるこの境界に——歎き沈む身のおきどころもないことか

かうしてつくづく人の世の愁を味つてゐられた。一體に慟巧で、琴なぞも稽古させれば、

日にそへて——  
うさ、宇佐、つ  
くし、筑紫とかけ  
てゐる。

琴、琴は七弦、箏  
は十三弦の樂器。

嘸や上達しさうな樂才も見えるが、境遇が境遇とて、誰が手をとつて教へようぞ。たゞ亡き母が姫の六つ七つ迄居られて手ほごきをしておかれたので、箏の琴を殊の外堪能に弾かれるところから、北方は我が腹の三郎君——十ばかりな男の兒が、この樂器に執心するとあつて、「この子に教へておやりなさい」といはれるまゝに素直に時々教へて居られる。

それに又、徒然の身の暇多いまゝに、裁縫を習はれたが、自然と上達して、巧にひねり縫はれるのを「よい心掛けた。顔容に取柄のないものは、地道な事を覺えておくのがよい」とて北の方は、聳二人の衣装をば次から次へと、とり集めて仕立てさせられるので、始めのうちこそ忙しいといふ位の事であつたが、後にはおち／＼夜も寝られない。それで少しでも遅れると、「これほどの事さへ厭な顔をするのね。一體何の役に生きてゐるの」と手厳しく言はれる辛さ、人知れず涙に暮れて、あゝやはりどうにかなつて仕舞ひたいと思ふ。一方では、本腹の三の君に裳を着せるとはや藏人少將に婚せて、これには綺羅を盡した取なしである。家族が殖えるにつけて落窪の君の苦しさは加はるばかり、それにこの家に仕へる者も、年若な派手好みの女が多く、地味な仕事のわかるものが無かつたやら、何にかにつけて輕蔑せられる情なさに、涙と共に裁ち縫ふまゝに

世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂身なりけり

こんな世の中をのがれて少しも早くあの世へとは思ふものゝ、思ふまゝにならぬのは哀しい命である。

後見うしろみといふのは髪長な器量よしなので、三の君の召使として否應なしに召し出された。この女、心から情なく悲しくて、

「あなた様のお側に居りたいので、前々も縁者えんじやのものから迎へに來た折でさへ、意地を張つてまゐりませんでした。今更何の爲に、仇し御奉公をしませうぞ」と訴へ泣くのを「なんのまあ、同じ家の中に住む間は、變つた事はない筈です。お前の衣装も見苦しかつたが、これからはその不自由もあるまいから、私は却てうれしく思つてゐます」

と優しく言はれる。まこと、いたはり深き主人の心の有難さ、その御主人の心細げな常日頃を知りぬいてゐて、お側を離れる心苦しさに、女は、隙さへあれば落窪の方にのみ來てゐると、それを又北方が口やかましくいふ。

「あの落窪の君が、いまだに此女こねを呼び込んでばかりゐるよ」と腹立つ氣色の怖しさ、しみみとした話も出來ない。

さて三の君の女房となつては、後見うしろみといふ呼名の不體裁だとして、阿漕あことよばれる事になつ



た。そのうちに賀君藏人少將の附人で、小帶刀こたはらばきとよぶ心利いた若者が、この阿漕に懸想して、文のゆきかひもや、時經つて、互に睦じく暮すやうになつた。

かうなると互にうちとけた夫婦仲の物語にも、阿漕はこの姫のこゝを話して、北方が分らん方で、姫は見るもおいどしい待遇を受けてゐられる、それに姫の優しいお氣立きだて、容姿みかたちの美しいことなど語るにつけても、涙を流して「どうぞこれぞと思ふ人に盗ませて、お仕合せな身にしてあげたい。あゝしておくのは勿體ない」と明暮、口癖にいつてゐた。

この帶刀の母親は、當時左近衛大將の御子息で、左近衛少將なる公達きんたちの乳母めのはであつた。この貴公子にはまだ奥方がない。それで地位ある人の姫の噂なども、あれこれと聞はれる話序に、帶刀がこの落窪の娘の身の上をお話したので、この少將の心が動いたらしく、人の居ぬ折を見て帶刀を召し、なほも細かにお尋ねになつた上、

「かはいさうに、まあ、どんなにつらからう。それもあの王族の血を引いてるんだね。わしにこつそり逢はせろ」とおつしやる。

「いや唯今のところ、そのやうな考へは先には少しもございません。しかしそのうちに私からよく通じておきませう」と申上げる。

「かれこれ言はずに姫の部屋へ案内してくれ。聞けば離れたところに住んでゐるといふではないか」といはれる。

帶刀はこの事を阿漕に話すと、阿漕は

「どうしてまあ、只今ではそのやうなお考へは露ほごもない上に、先方様は名うての色好みと承つて居りますものを、とても」

と取合ふ氣色も見えんので、帶刀も困つて夫婦甲斐もないと小言をいふ。「仕方がない、それでは今よい折を見て」と阿漕は答へた。

主人思ひの阿漕は、姫のお部屋續きの廂二間を、我が曹司にいたゞいてゐるのではあるが、同じ床の上では勿體ないと、わざ／＼一段低い一間をしつらへて、そこに起臥してゐたのである。

頃は八月の初めつかたであつたかと思ふ。姫君は只一人打臥して、寢られぬにつけても亡き母上が戀しくて、「どうぞ早う私をあの世へお迎へ下さいまし。本當につらい思ひをして居りまする」と獨ごちながら、

我に露あはれをかけば立ちかへり共にも消えようきはなれなん

浮世にのこる一人子を、少しでも哀れと思召さば、迎へに来て共に消えて仕舞つて下さい——お母様——さすればこの辛い思ひから離れることが出来るから。

ど、氣休めに歌つて見ても詮ない事であつた。

明くる朝、物語の序に阿漕は

「帯刀がかう／＼申しますのですが、いかゞ致しませう。かうして一生お過しになることも出来ずまいが」と切り出して見ても、何の御返事も無い。それで阿漕も一寸當惑してゐると

「三の君のお手水を差上げて下さい」と呼び立てられて、そのまゝで立つて行つた。姫の心中では、こにもかくにも、悪い月日に生れたものに善い目が出る筈もない。母親が無いといふのが、不幸な證據だと諦めて、たゞあの世へと願ふ心が深い。とはいへ、たどへ尼法師になればとて、この家を離れては何の生計なまも知らぬ女子のこどとて、いつそ消えうせて仕舞ひたいとのみ一筋に考へられる。

さて帯刀が、大將殿の御殿へ參上すると、少將が

「どうだ。例の件は」と問はれる。

「申し傳へましたが、こんな事を申してゐまして、急に埒の明きさうにも思はれませぬ。縁談などいふものは、親のある人はそれこそ急ぎませうが、あの殿様もすつかり北の方にまゝ、められて居られるので、取計らひさうも見えませぬ」

と帯刀は答へた。

「だから、わしは始めから姫の部屋へ案内をしろといふのだ。事々しうあの家の掣あつかひをされるのもきまりが悪い。それで、いとしければ、わしのところへ迎へてもよい。

氣に入らねば、世間がうるさいとでもいつて、止めてしまへば濟むこと」とおつしやる。

「いや、その邊の御決心をはつきり承りました上でお取持ちも致しませう」と申上げると  
少將

「それは無理だ、一度見た上で心をきめよう。見ないできめられるものでない。お前は、まあ、忠實に計らつてくれ。心配しなくても、そんなにふつと捨て、仕舞ふこともあるまいよ」といはれる。

「そのふつととおつしやるがまことに水臭い文句でございますな」と澁るので、男君は笑

ひ出して、

「いや、ながくと言はうとして言ひそこなつたんだよ」

と戯れながら「これを」といつて、お手紙を渡されると、帶刀は不承無精受取つて、やがて阿漕に逢つて、お手紙だといつて差出すと、女は驚いて、

「あゝいやだ、どうしようといふのです。つまらん事はお耳へ入れたくないんですわ」といふのを抑へて、

「いや、お返事だけは是非なさるがよい。決してお爲に悪い事ではないよ」

といふので、受取つて、姫のお前に來て、

「あの、いつか申上げましたところからの御文でございます」とて差上げると、姫は

「なせそんなことするの。母上がおきゝ遊ばしてはなんのよいとおつしやらう」といはれる。

「さうでない時には、あなたをよくおほせられますか、北方なぞに御遠慮遊ばさないでもようございますわ」と勵しても御返答はない。

阿漕、御文を紙燭しよくともして開いて見ると、たゞこれだけ書いてあつた。

紙燭、紙縷を束ねて油をひいたもの

蠟燭の代りに用ゐ  
た。

君ありと大きく心を筑波根のみねご戀しきなげきをぞする

あなたといふ美しい方があるとき、つけて、まだ見ぬうちから戀に沈んでゐる男があります。

「まあお美事な」とひとり呟いて見ても、姫には何の響きもない様子だから、くるく巻いて、御櫛の笥の中に納れて、阿漕は坐を立つた。帯刀は阿漕を待ち受けて

「ごうだ、姫君は御覽になつたかい」

「いゝえ、お返事もなかつたのでそのまゝにして置いて來ました」

「なんにしても、此儘でおいでになるよりは善からう。それにわしら二人の爲にも好都合な譯だから」と帯刀がいふ。

「それも先様のお志さへ確なら、そのうちには色よい御返事も……」

と阿漕は答へる。

朝早く父おとどが晝の御坐所へお出での序に、落窪の部屋を覗いて見られると、姫の服装もいとわろく、たと持前の黒髪ばかりが房々と肩にかゝつてゐる姿を、さすが不憫と見られたか、立停つて、

「その服装はごうした事だ。可哀さうには思つてゐても、他の據所ない子供の世話に紛れて、えう構はないでゐるんです。よささうな事があつたら、かまはず自分で取計らひなさい。氣の毒さうに、かうした日を送つてゐて」

と言はれると、親ながらも身の耻しさがこみ上げて來て、姫は悲しさに詞も出ない。おとごは御殿に歸つて北方に

「今落窪のところを覗いて見ると、この肌寒に、みすばらしい白裕を只一つ着てゐたよ。他の子供の着古してもないか、着せてやるがよい、夜は寒いことだらう」

と言はれると、北方は

「まあ、平素取揃へてお着せするのですが、無くしてしまひなされるのか、長くはえう着ておいでなさいません」

と申されるので、

「あゝ困つた奴ぢや。母親に夙く別れて、氣立も碌でないのだらう」

と嘆息なさる。

さても北方は、智少將の君の表袴を姫のところへ縫ひに遣られて、口上に

「この縫物はいつもより丁寧<sup>ていねい</sup>に仕上げて下さい。褒美<sup>ほび</sup>に着物を一枚着せて上げよう」  
とあるのをきくにつけて、堪へられないほどに悲しかった。

すぐに美事に縫ひ上げると、北方は満足の體で、自分の着させた綾織の綿入れを着せられた。晩秋の風は日一日、吹きすさぶ時節に、この薄着ではと思ひわびてゐた心地に、少しうれしい氣もするのは、重なる不幸で心の張りも弛んだのであらう。

この聲の少將は、よろづにつけて、悪い事には口やかましく小言をいひ、善いことはまたきはだつて譽めそやすたちなので、この装束の出來ばえを見て「いや美事だ、よく縫ひ上げた」と賞美するのを聞いて、女房が北方へ申上げると

「これ靜に。それを落窪に聞かせてはならぬ。増長するよ。あゝいふ者はいつも萎縮<sup>いぢぢけ</sup>させておくがよい。それが取柄で人にも使はれて行くものだ」

と言はれるので、女房達は

「あまりといへば、ひどいことを仰しやる。あのいごほしげな姫様を」  
と、忍びやかに同情するものもあつた。



左近の少將の方では、一旦言ひ出された事でもあるから、第二の御文は薄につけて來た。

穂にいで、いふかひあらば花すゝきそよごも風にうちなびかなん

すゝきも穂に出る心のうちを言ひ出した甲斐があるなら、せめてそよのおとづれ位はあつてほしいものだ。

御返事はなかつた。又、時雨の寒く降る日に

かねて承つてゐたと違つて、人情といふものを御存じありませんでした。

と前書して

雲間なきしぐれの秋は人こふる心のうちもかきくらしけり

あなたを思ふ私の心のうちも——降りやまぬ秋の時雨の空のやうに——かき暗れて深い歎きに沈んでゐます。

御返事はなかつた。それで更に

天の川雲のかけはしいかにしてふみ見るばかりわたしつゞけむ

及ばぬ戀であらうとも、あの雲の梯橋を踏み見るまでは、絶えず言ひ渡りませう——あなたの又見るまでは

かく、毎日といふではないが、途切れずに、文のたよりは繰返されるが、露程の返事もなかつた。

少將はそれで、帶刀を捉へて、